

大学入学共通テスト「情報」導入に対する受験生の意識と受験対策の実態

小玉 淑乃

令和4年度から新たな必修科目として「情報Ⅰ」が開始された。旧課程の情報科と比較して、「情報デザイン」や「プログラミング」、「データの活用」などが新たな内容として加わった。さらに令和7年度からは大学入学共通テストの出題科目に「情報」が追加される。これを受けて国立大学協会は2024年度以降の入試では、国公立大学は大学入学共通テスト「情報」の点数を原則利用すると発表し、多くの受験生が「情報」を受験科目として勉強するようになることが考えられる。大学入学共通テスト「情報」導入の決定を受けて様々な先行研究がなされているが、大学受験生の視点に立った調査や研究ほとんど行われていないのが現状である。そこで本研究では、2025年度から大学入学共通テストに「情報」が導入されることに着目し、(1)「情報」受験対策手段の実態、(2)高等学校・自習における受験対策の充実度と理解度の関係、(3)志望大学の「情報」得点使用状況と勉強時間・優先度の関係、(4)性差による「情報」の難易度・理解度の自己評価の違い、(5)高校2年生段階からの「情報」の学習手段・受験校選定への影響および変化、(6)家庭の学習環境と「情報」理解度の関係と6つの観点を中心に、大学受験生の意識と学習・受験対策の実態を明らかにすることを目的とした。

令和7年度大学入学共通テスト「情報」の受験予定者を対象にオンラインでの質問紙調査を実施し、1454件の有効回答を得た。分析の結果として、「情報」ならではの受験対策上の悩みに、過去問題が存在しないことが挙げられた。受験対策手段の実態として、約半数の受験生は授業以外にほとんど対策を行っていない一方、自主的に参考書や映像教材を利用する者も一定数存在した。また高校で「情報」の受験対策が充実しているほど理解度が高まる傾向が見られ、特に対策が実施されていない学校の生徒は理解度が低くなる可能性が示唆された。さらに第1志望の大学で「情報」の配点が高い場合、「情報」勉強時間の割合や優先度が有意に増加することが明らかになった。性差においては、男性が「情報」を「理解している」、受験対策が「簡単だと感じる」と回答する割合が高く、女性は「理解していない」「難しいと感じる」と回答する割合が高いといった結果であった。高校2年生段階での回答と今回の調査での回答を比較したところ、「情報」が共通テストの点数に加わることに前向きな意見を持つ受験生が増加していると推察された。家庭の学習環境については、自由に使用できるパソコンやタブレットの所持状況が理解度に影響している可能性が示唆された。今後は2025年1月の大学入学共通テスト「情報」初回実施を踏まえて、情報科の効果的な指導法や学習環境整備の検討、そして家庭環境や生徒の性別に起因する格差の解消や受験対策の負荷を軽減することに繋げていく必要があると考える。

(指導教員 小野 永貴)